

テーマ

国際通貨三国志、そしてBrexit

適用分野

グローバル化、国際通貨



研究名称

英国と欧州との通貨協調をめぐる関係史

氏名所属

広渡 潔 教授  
マネジメント創造学部

内容

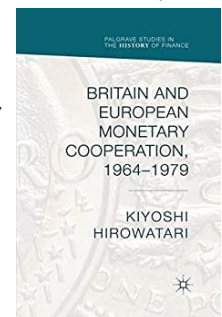
### ●特徴

陰りがみられるとはいえ、米ドルが今でも代表的な国際通貨であることは言を俟ちません。しかし19世紀はそうではなかった。大英帝国の繁栄の下で当時のグローバルな取引を支えたのは英ポンドでした。それと同時に英ポンドの価値は金によって裏打ちされており、まさに金本位制の時代でした。しかし2つの大戦を経て、通貨の覇権は英ポンドから米ドルへとシフトしていきます。1970年代初頭までは米ドルは19世紀の英ポンドと同じく金によって価値が裏打ちされていましたが、金準備が底をつくなか米ドルは金とのリンクを捨てます。それはまさに国際通貨制度のなかで長年君臨してきた金という王様を廃位に追い込むもので、以降は金価値から独立した「事実上のドル本位制」が成立します。そしてこの米国の「クーデター」に怒ったのが欧州で、独自の通貨協調を目指し紆余曲折を経ながらも成立したのがユーロです。そして英国はその衰退のなかで米ドルの覇権と欧州の挑戦のなかでその通貨主権を模索しようとし、まさに戦後しばらくは国際通貨三国志の世界だったわけです。

### ●研究内容

英国の大学院での博士論文をもとに2015年に *Britain and European Monetary Cooperation, 1964-1979* (2015、Palgrave Macmillan) を出版しました。これは米国との伝統的な通貨外交である Sterling Dollar Diplomacy と欧州の通貨協調の対立軸のなかで主に戦後の英国の通貨外交を分析したものです。

前職の銀行勤務の時代にイタリアで5年ほど勤務しそこで1992年の欧州通貨危機の市場の混乱 (Black Wednesday) に私自身も翻弄されました。その混乱のなかで英ポンドは欧州通貨制度の枠組みから外され、ユーロにむけた欧州通貨協調から身を引きます。いわばEUという「家族」のなかでEU統合の象徴的な実験である共通通貨ユーロから距離を置く「家庭内離婚」となります。そしてその延長線上に2016年のBrexitがあります。この本はその1年前に書かれたものですが、英国がDunkirk (第二次世界大戦中英国がナチスドイツにフランス港町Dunkirkに追い込まれ必死の欧州脱出を試みた作戦) の二の舞になるので、との示唆で結んでいます。



キーワード

『国際通貨』 『英ポンド』 『米ドル』 『欧州通貨制度』 『ユーロ』 『Brexit』

連携方法

■ 講演 ■ 研修 ■ 研究相談 ■ 学術調査 ■ コメント ■ 共同研究